

初めての能鑑賞

能楽堂に行ったことのない人は、行くことに躊躇するかもしれないが、信濃町にある国立能楽堂にしる御茶ノ水の宝生能楽堂にしる外見は他の劇場と何ら変わるものではない。ただ、室内に入ったときにその設え(ツツエ)に戸惑いを、異空間の珍しさを感じるかもしれない。特に、MOAにある能楽堂はそれ自体癒される空間である。能楽堂の室内は他の劇場と違い緞帳のある舞台がない。舞台が2間四方(約4m)の檜舞台が客席にせり出している。しかも舞台の上には屋根があり、屋根を支えている柱(演者には大変重要な柱)があり、舞台の横からは演者が出入りする廊下(橋掛りという)があり、また正面には大きな松の絵が描かれた鏡板がある。右奥には地謡(所謂コーラスに相当する)が出入りする出入口(切り戸という)がある。このように、客席からは通常の劇場とちがう別の空間(異空間)が存在しているのを感じるであろう。

もともと能興行は屋外で行うものであったからであろう、現在でも靖国神社・熱田神宮・平泉の能楽堂(最古の能楽堂のひとつ)・佐渡にあちこちにある能楽堂等々がその形態を残している。

本番の演技が始まる前に、揚幕の後ろにある鏡の間で笛・小鼓・大鼓(材加という)・太鼓の演奏が始まる。(試演は5分から8分ぐらいか?)。これは実際の舞台での演奏と違って楽器の調子すなわち今日の空気(乾燥状態とか)から楽器の調子をみたり、演者の調子をこの演奏によって体感する。一区切りつくと、揚幕の横を少し開けて奏者が笛・小鼓・大鼓・太鼓(番組によっては出演しないことがある)の順でシツシツと出て来、所定の位置(囃子方という)に座る。

まず初めに、笛が一声と言ってピーと笛を吹き演奏の始まりをつげ、一息ついで演奏が始まる。これはオペラの前奏曲に匹敵するものと思っている。10分から15分ぐらい?ではある。オペラの前奏曲と同じで、この能一番の内容を抽象的に表現しているといっても過言ではあるまい。(一般的な能の場合)

次に、笛の音につれて初めにワキ(場合によっては従者を伴って)が登場する。登場人物は役によってさまざまだが、シテ(主役)・ワキ(シテの相手役)・ワキズレ(ワキの従者)が登場演者であり、中入り(前場と後場の中間にあり)の時に狂言師が出てきて物語の内容や登場人物の謂われなどを説明する。前場は現世の語りの世界であり(現在能)、後場は夢幻の世界(夢幻能)である。

主役のシテが最初に出てくる能もある、例えば七騎落・小袖曾我・鉄輪・邯鄲等がある。

能を鑑賞するには予めパンフレットなどで内容をよく理解しておく必要がある。これはオペラ鑑賞等と同じである。国立能楽堂では椅子の前面にモニターがあり、出し物の内容や出演者の名前、さらに演能が始まるとセリフが映し出されその時々場面が理解出来るようになっているので、初心者にとってはありがたい。また所作(舞の振る舞い)は前もって勉強しておくより深く理解することができる。さらに、インターネット(you-tube)でもセリフを調べることができるので、より深く知りたい人はそれを持って能楽堂に行くのもよいかもしれない。

能は、昔は形式に従って五番演じられた。五番立てというが、一番目(初番目物という)は脇能と言って神霊が祝福を与える能、二番目物は修羅道に落ちた武人の霊が主人公で多くは平家物語に由来する。三番目物は女性を主人公とした優美な舞が見どころで源氏物語等に由来する。四番目物は他の分類に属さない雑能で、現実的・写実的な作風(伊勢物語など)が多い。五番目物は切能といって鬼や天狗などが出現するテンポの速い能が演じられる。今は演じられる本数少なく、三番か二番が演じられることが多い。

私の小さいころ、近くの稲荷神社の祭礼で演芸舞台があり、そこでお神楽をやっているのを思い出す。そのお神楽は、神楽師が初めは鈴を鳴らしながら天下泰平・五穀豊穡を祈って舞い、休憩を挟んでヤマタノオロチの出てくるお神楽を思い出す。春・秋季祭礼にはどこの町でもやっていたのを思い出す。

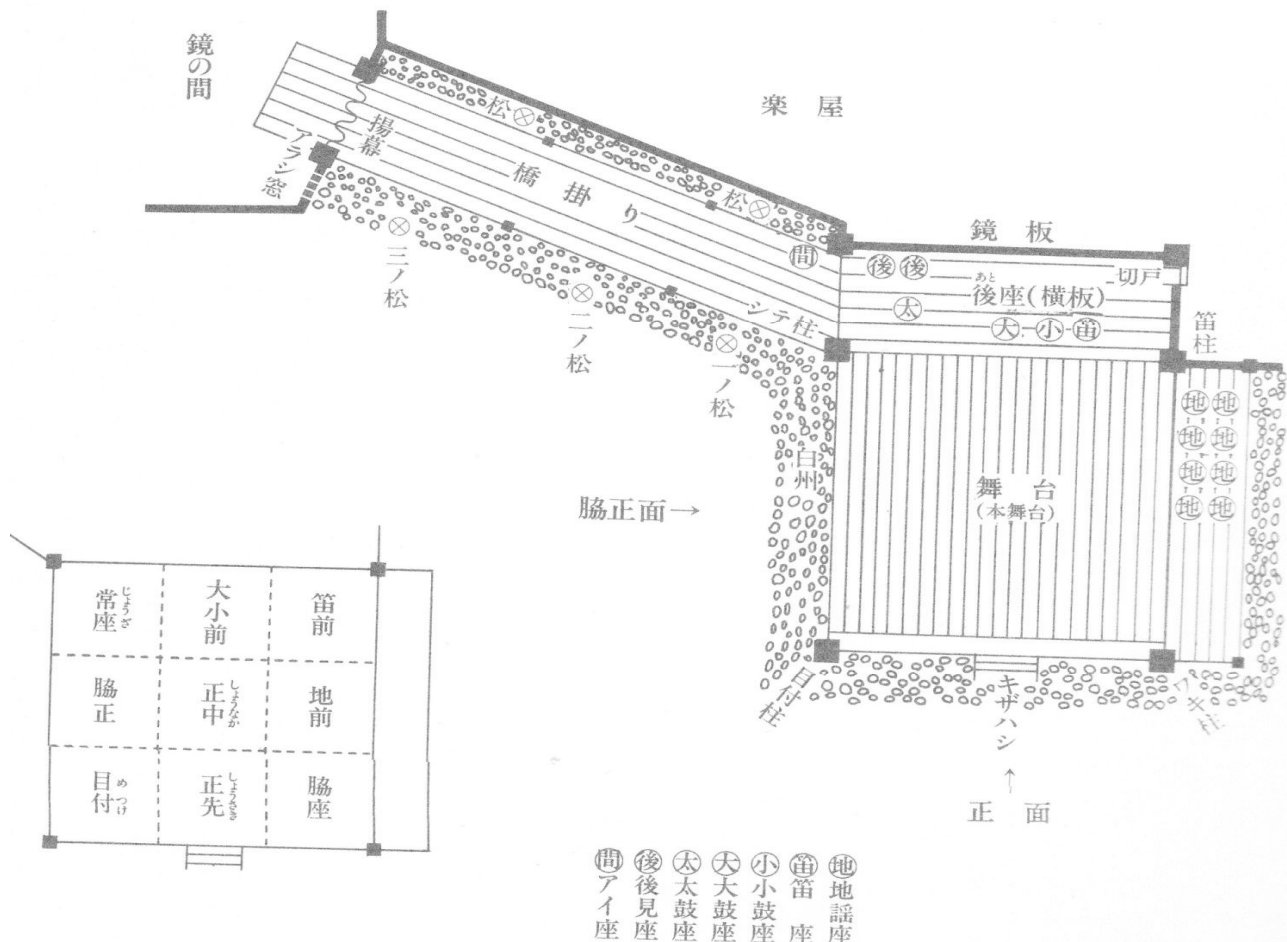
能は神世の昔から伝承されているお神楽や田楽を芸術の域に達せしめた演芸と思っている。足利時代、観阿

弥・世阿弥親子が足利義満の庇護を受けて田楽や猿楽を芸能・理論の両面から大成され”幽玄能”と言われる域まで達せしめたものである。これが今日幾多の困難な時代を乗り越えて存続しているというのは、一に「秘すれば花」という言葉につけるものと思われる。「花不易」という言葉もあるがまた漢詩「長恨歌」に「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」という詩と同義(同根)と思っている。決して滅びることのない[花]なのである。

演劇は、すべての演技において「序・破・急」によって構成されているといっても過言ではないと思う。歌舞伎は勿論、新劇・オペラ・舞踏・落語……すべての演劇がそうであるように、能の「舞」においても同様で、序の舞、中の舞、切の舞のそれぞれにおいて序・破・急によって構成されている。これらの舞が能を引き立て、引き締めている。舞が下手だと能一番虚しいものとなってしまいます。舞は、単純で前へ進むか後ろに下がるかだけである。これを謡いの内容により緩急をつけて舞うわけであるが、序破急をつけ・間合いをつけて観客に感動させるわけであるから至難の技と言ってもよい。また、観客もそれなりに眼を肥やしておく必要がある。

能(舞も同様であるが)は、無駄なものを削って削っての究極の所作で、これは俳句に通じるものがある。例えば、俳句に「山笑う」という季語があるが、これだけで山が花(桜)で埋め尽くされて華やかな様が想像でき説明はいらぬ。同様に、例えば能「須磨源氏」の中で、「ありし雨夜の物語、聞くにも袖を潤して山の薪の重きにも思ひ……」と、これは有名な「雨夜の品定め」という源氏物語の一場面を彷彿とさせ源氏に想いを馳せられるものであるが、源氏物語を知らないでこれらをすべて理解するのは難しい。源氏物語・伊勢物語・平家物語等々知らないで理解が半減してしまう。しかし、日本人であればその雰囲気だけでも感じて体感する(DNAあり)だけでも能が楽しくなると思う。能演芸には、現在観世流・宝生流・喜多流・金剛流・金春流の5流があり、宝生流・喜多流は主に関東、金剛・金春は主に関西で活躍している演芸である。観世流は全国的に展開している。

能舞台平面図



▶入口之図 櫓の紫幕の九本矢車模様は宝生大夫家の紋である



弘化勸進能

寺社建立などへの寄付を名目に、入場料を取って公開する能が勸進能である。江戸期のそれは能役者のための催しに変質し、かつ江戸での勸進能興行は観世大夫の特権化していたが、十一代将軍家斉が宝生流を嗜み、宝生座が繁栄した余勢で、弘化五二八四八年に宝生大夫友于が駒込橋門外で晴天十五日間の勸進能興行を許された。町々に切符を割り当てる制度のおかげではあるが、多い日には五千人以上の入場者を数えた。その模様を克明に画いたのが『弘化勸進能繪巻』で、原本筆者は斎藤月岑、掲出したのは大久保能雪の模写本である。この弘化勸進能が江戸期の能が咲かせた最後の花で、幕末の風雲は能を逼塞させずにはおかなかったのである。

▼歌麿筆寺子屋小謡図版画 謡曲の一節だけを歌つ小謡は庶民に広く普及し、寺子屋での教科課程に組み入れられていた。



▶鏡之間図 「安宅」の弁慶一行が子方義経を先頭に 鏡之間から幕を上げて橋掛りへ出る所
 ▶楽屋之図 この勸進能には宝生座関係の役者が全国から召集されていた
 ▶打出し退場之図 出口の大桶は火災に備えてのもの。着飾った婦女子の姿も見える

